久保田城跡

— 佐竹史料館増築に伴う二の丸発掘調査報告書 —

1992・3

秋田市教育委員会

序

秋田市民の憩いの場として親しまれてきた千秋公園は、秋田藩主佐竹氏の居城として、１２代、２６４年の歴史を今日に伝えております。

平成２年度に開館した佐竹史料館は、佐竹氏関連史料の収集、展示を行うとともに城内唯一の藩政期の建物である御物頭御番所、市制百周年記念事業の一環として復元された御隅櫓と一体になって佐竹氏と秋田藩の歴史を直接目で見、感じる郷土学習の場として活用されてきましたが、平成３年度、施設の一層の充実を図るため、増築工事を行うこととなり、事前に発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、装飾に様々な技法を凝らした陶磁器をはじめ、多量の遺物が出土し、秋田藩士の日常生活をいきいきと映し出しております。

この調査の実施にあたり関係機関のご指導と多くの方々から積極的なご協力をいただき深く感謝申し上げます。本書が文化財愛護のため、さらには研究資料として活用されるとともに、秋田市形成の原点ともいうべき久保田城の歴史研究を通して、郷土意識の高揚へつなげる一助となれば幸甚に存じます。

平成４年３月

秋田市教育委員会

教育長　長門伸一

例　言

1．本報告書は、秋田市立佐竹史料館増築に伴って、平成３年１２月から平成４年１月まで実施した秋田市遺跡詳細分布調査報告書ＮＯ２１７の久保田城跡（二の丸）の発掘調査報告書である。

2．調査体制

　調査主体　　秋田市教育委員会

　調査担当　　秋田市教育委員会文化振興課・秋田城跡調査事務所

3．本報告書の執筆、編集は納谷信広があたった。

4．出土遺物については佐賀県立九州陶磁文化館　大橋康二氏よりご指導、ご教示をいただいた。

5．図版に用いた絵図類は参考文献１２からの引用である。

6．発掘作業員は次の方々である。

　斎藤雄光、鎌田克子、佐藤イト、佐藤キクノ、佐藤スズ、佐藤トシ子、藤原アイ子

7．発掘調査による出土遺物、実測図、写真、その他は秋田市教育委員会が保管する。

目　次

〔１〕遺跡の概要と調査の経緯……　１

〔２〕調査地の歴史的変遷……　２

〔３〕発掘調査区層序……　４

〔４〕検出遺構と遺物……　４

〔５〕考察……　１６

〔1〕遺跡の概要と調査の経緯

久保田城跡は、秋田市のほぼ中央部、秋田駅より北西約７００ｍの地域に位置する近世の城館跡であり（第１図）、慶長８年（１６０３）から翌９年にかけて築城された、秋田藩主、佐竹氏の居城である。慶長７年（１６０２）、常州水戸から秋田六郡に遷封された佐竹義宣は当初、旧領主秋田実季の居城であった土崎湊城に居住した。しかし、湊城は規模が小さな平城であり、家臣団の居住地の確保や諸施設の建設用地等の収容能力的な問題や防御的な不安もあり、久保田神明山を選定し、新城の縄張りを行った。その築城期間は約１年間という短期間であり、それ以後も継続的に整備を図ったと考えられる。

久保田城跡は本丸、二の丸及び北の丸（二の丸の延長）、三の丸の三重構造になっている。今回、調査が行われたのは、二の丸の東南部である。二の丸は本丸の東南側に位置し、標高約２２～２５ｍ、東西約７６．９ｍ、南北約４０１．８ｍで、周囲を内堀と土塁に囲まれている。施設としては、北側の現在の胡月池付近に厩や金蔵が、中央部の二の丸広場には厩が、今回の東南部の現在の佐竹史料館付近の土塁に囲まれた一画には鐘楼、諸役所等が置かれていた。また能や猿楽の舞台が設けられたり、各種の儀式、行事にも利用されていた（表１）。

第１図　調査区位置図

久保田城は明治以降、千秋公園となり、市民の憩いの場として親しまれてきたが、旧秋田市立美術館を改装して平成２年度に開館した佐竹史料館の一層の充実を図るため、平成３年度、増築されることとなり、工事予定地の事前発掘調査が実施された。調査期間は平成３年１２月９日より平成４年１月８日まで

年号	記述内容	掲載
１６０３	湊城は手狭であり、収容能力に問題があり、新たに久保田神明山を城地とした。	秋田市中世文書(上)
１６０４	久保田城（新城）完成した。	秋田市中世文書(上)
１６３９	二の丸に時鐘を設置する。	秋田藩御年譜(全)
１６４０	大風により時鐘が壊れ、修理する。	秋田藩御年譜(全)
１６４１	二の丸安乗寺の前に舞台を作り、猿楽を行う。	佐竹家記(中)
１６７０	二の丸御小屋、御門、長屋の柱立、棟上げを行う。	秋田史料
１６７１	佐竹義処、二の丸御殿より本丸に移る。	秋田史料
１６７１	佐竹義知、二の丸御小屋に入る。	秋田史料
１７１１	二の丸馬場で夏馬を見る。	佐竹家記(中)
(１７５１)	二の丸には諸役所、寺２箇所、厩がある。	秋田藩御年譜(全)
(１７７５)	二の丸には門８箇所、寺２箇所、役所３箇所、金蔵、厩、棟３箇所あり。総坪1844坪である。	秋田藩御年譜(全)
１８１６	二の丸御厩の普請が完成する。	A刊系譜
１８２５	二の丸において踊りを見る。	佐竹家記(下)
１８４２	二の丸の厩が土蔵、板倉を含めて焼失する。	佐竹家記(下)
１８６６	二の丸の時鐘が破れて、鋳なおした。	戸田家日記
(１８９８)	二の丸馬場は二の丸の東北部にあり、南北長さ８０間、幅６間、中央西に馬見所あり。	秋田市中世文書(下)
(１８９８)	金庫（土蔵）は二の丸北東の隅に建設、２棟であり、側に金庫役所があった。	秋田市中世文書(下)
	二の丸は本丸より三丈六尺ほど低い。	秋田藩御年譜(全)

表１　二の丸関連文献資料　※(　)は記述年代

であり、調査面積は１２６㎡である。

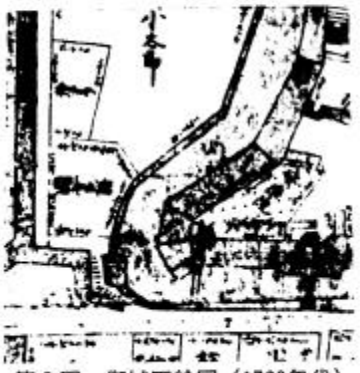
〔２〕調査地の歴史的変遷

今回の調査地は、二の丸の東南部にあたり土塁により区画され、役所、寺院等が置かれた地区である。この地区の、歴史的な変遷は、文献資料より次のように理解できる。

久保田城築城以前のこの台地は、川尻村の鎮守である、神明、総社の社があり神明山とよばれていた。また慶長８年（１６０３）の向右近宣政伝記には、「昔三浦源五郎カ故城也」とあり、中世には館として利用されていたことがうかがえる。しかし、中世における建物の構造、台地の利用状況などはあきらかではない。

久保田城の築城は１６０３年から、翌１６０４年までの一年間で行われたとされる。しかし、築城期間が短期間であること、１６３０年前後にも三の丸、北の丸、堀川などの普請の記事があることなどから、当初の普請は主要部に留まり、１６０４年以降も継続的に整備が行われていた事がうかがわれる。したがって、築城当初の普請の範囲、内容は明確ではないが、二の丸は本丸とともに城の基本構造を規定する城の中枢部である事から、１６０４年の段階でそれ以降の絵図に見られるような形に普請されていたと考えられる。そして、二の丸東南部には次のように様々な施設が置かれている。

第２図　御城下古絵図（1660年代）



第３図　御城下絵図（1760年代）

第４図　秋田城廓市内全図（1868年）

○安楽院（安楽寺）

「梅津政景日記」などの資料からこの地区に築城当初から置かれていたと考えられる。常州水戸よりの遷封の際、移した宝鏡院を本寺とする佐竹氏の祈禱寺である。当初は安楽寺、後に安楽院と改称された。秋田沿革史大成には「常ニ勤ルナク、昔時ヨリ藩主出陣ノ門出ニハ此住僧ヲ血祭トシテ首ヲハネル云伝ヘタリ」とあり住職は置かれていなかった。そして算用所や文書所が置かれるなど役所としての機能が強かったと考えられる（第２図）。

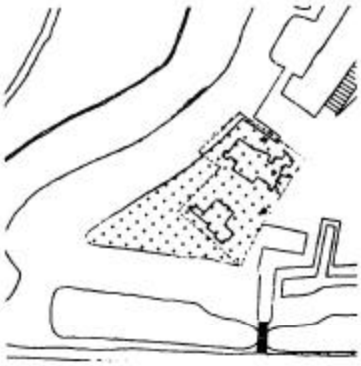
○鐘楼と善性院

安楽院の南側には善性院とよばれる同じく無住の寺院が置かれていた。その設置時期は安楽院とほぼ同じ頃と考えられる。１６３９年、この善性院の梵鐘という名目によりさらに南側に鐘楼が置

かれ、八橋で鋳造された鐘により時鐘として用いられた。

○勘定所と境目方役所

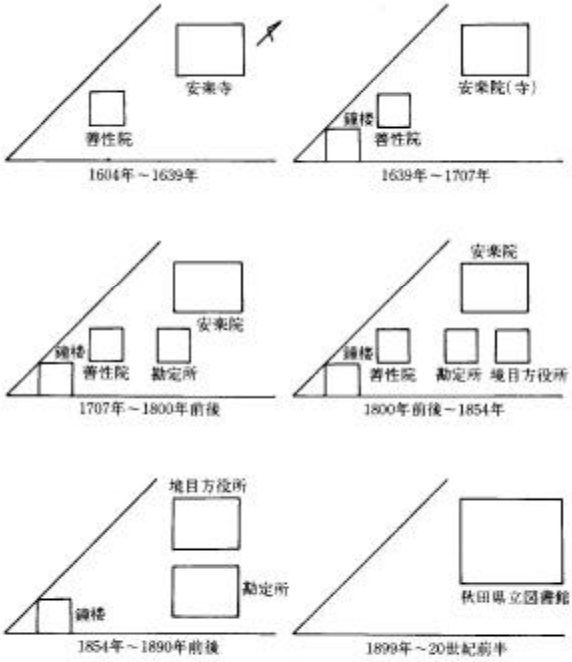
１７０７年、安楽院の南側に勘定所が設置された。勘定奉行配下の勘定役が勤務し、金銭出納や物産関係の用務を行っていた。その後、勘定所に隣接して境目方役所が設置された。境目奉行下役の境目方物書等が出勤し、国境の調査や図面作成等を行っていた。境目方役所の設置年代は明確ではないが、１７６０年代の絵図に記載されていないことから（第３図）１８世紀の後半から１９世紀の前半と考えられる。また、ともに土蔵が付属していた。



第５図　秋田旧城之図（1884年）

以上の施設は１８５４年、放火により勘定所、安楽院、境目方役所が炎上、鐘楼と土蔵が類焼を免れたとされる。その後、１８６８年の絵図（第４図）、１８８４年の測量図（第５図）には、勘定所、境目方役所の記載はあるが、安楽院の記載はなく、火災後、再建されなかったと考えられる。

勘定所、境目方役所がいつ解体されたのかははっきりしない。しかし、１８９９年にこの地に秋田県立図書館が建設されていることから、１８８４年から１８９９年の間ということになろう。その後、１９５７年に秋田市立美術館が建設され、今日に至っている（第６図）。



１６０４年　二の丸造営（資１）

――梅津政景、安楽寺内の算所所に勘務（梅津政景日記）――

１６３９年　二の丸に時鐘を設置する（資１）

１６６０年頃　絵図に安楽寺記載（図２）

１６９７年　安楽院に文書所を開設し史料を収集する（この頃安楽院に改称）

１７０７年　勘定所を二の丸に設置（国典類抄草稿）

１７０９年　時鐘堂の建替えを実施する（国典類抄草稿）

１７４５年頃　絵図に安楽院、勘定所記載

１７６０年頃　絵図に安楽院、勘定所記載、境目方役所はなし（図３）

１８５４年　安楽院、勘定所、境目方役所焼失（伊藤国治記）

１８６８年　絵図に勘定所、境目方役所記載、安楽院はなし（図４）

１８８４年　測量図に勘定所、境目方役所記載、安楽院はなし（図５）

第６図　二の丸東南部変遷模式図

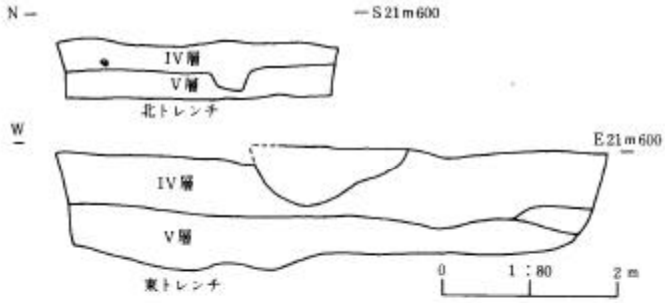
〔３〕発掘調査区層序

発掘調査区の層序を次のように分類する（第７、８図）。

Ⅰ層　表土である。厚さ約３０cm程の黒褐色土層である。

Ⅱ層　黄色粘土と石炭殻を交互に敷き詰めた整地層である。厚さは約２０cm。

Ⅲ層　黄褐色粘土による整地層である。明治時代以降の陶磁器が出土しており、Ⅱ層ともども明治時代以降の整地層であると考えられる。厚さ約３０cm。



第７図　トレンチセクション図

Ⅳ層　黄色粘土による整地層であり、部分的に灰青色の粘土が被っている。（黄色粘土の変色の可能性が強い）陶磁器、瓦等が出土しているが、Ⅲ層と異なり明治時代以降の遺物は認められず、江戸時代の整地層と考えられる。遺物の出土は上部に限定されることから１６０３、１６０４年の築城時の大規模な整地層とその後の改築等に伴う小規模な整地層に分かれる可能性があるが土層からは判然としなかった。Ⅳ層面上における精査により柱列跡、土壙、焼土遺構等を検出した。厚さ約６０cm。

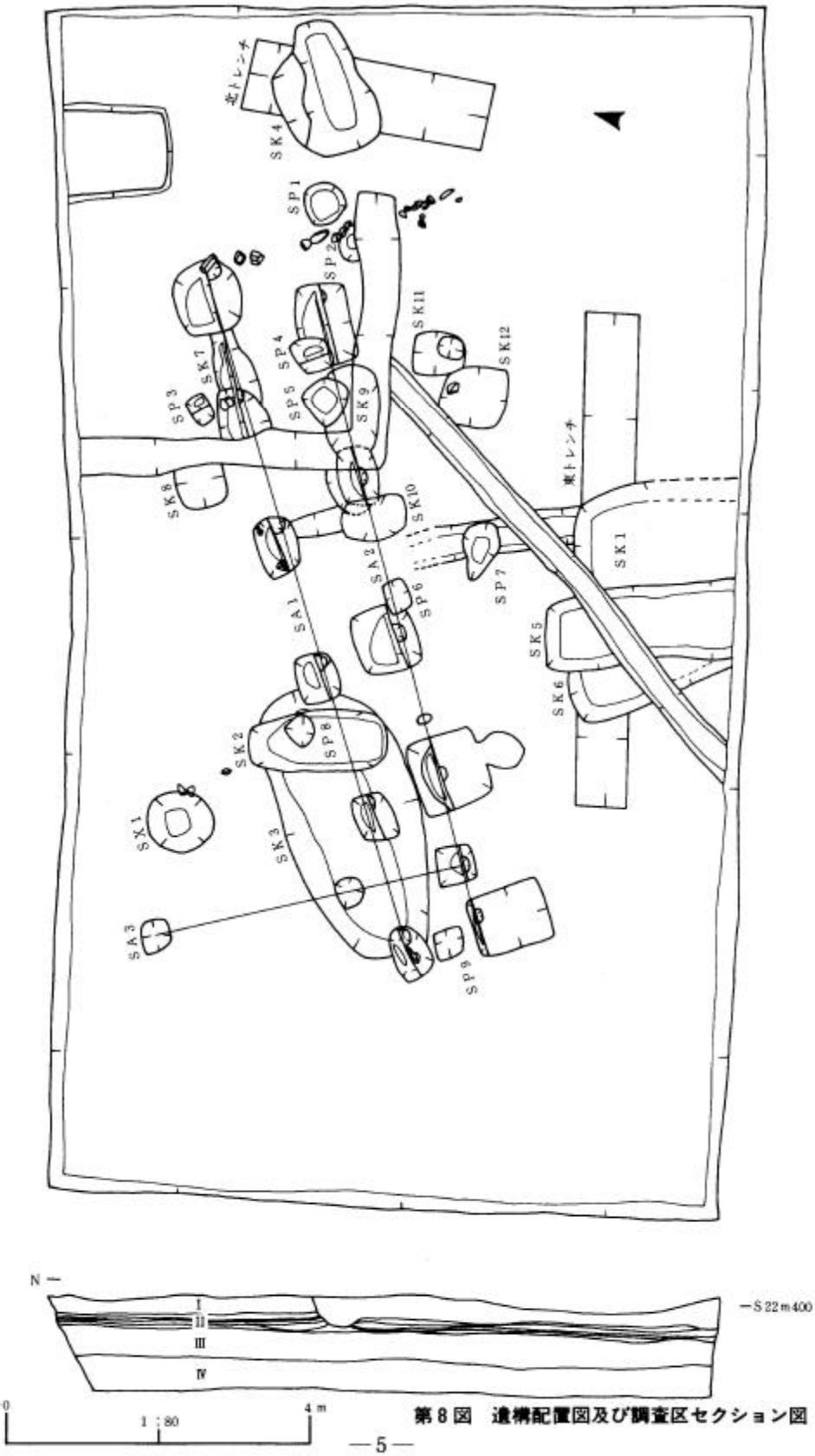
Ⅴ層　地山粘土層。調査区北側及び西側にいれたトレンチにより確認された。Ⅳ層より粘性が強い黄色粘土層である。

〔４〕検出遺構と出土遺物

今回の調査において、Ⅳ層より、柱列跡（ＳＡ１～３）、土壙（ＳＫ１～１２）、ピット（ＳＰ１～９）、焼土遺構（ＳＸ１）等の遺構を検出した（第８図）。以下、柱列跡、焼土遺構、及び遺物の出土が認められた土壙、ピットについて記述する。

１号柱列跡（第９図）

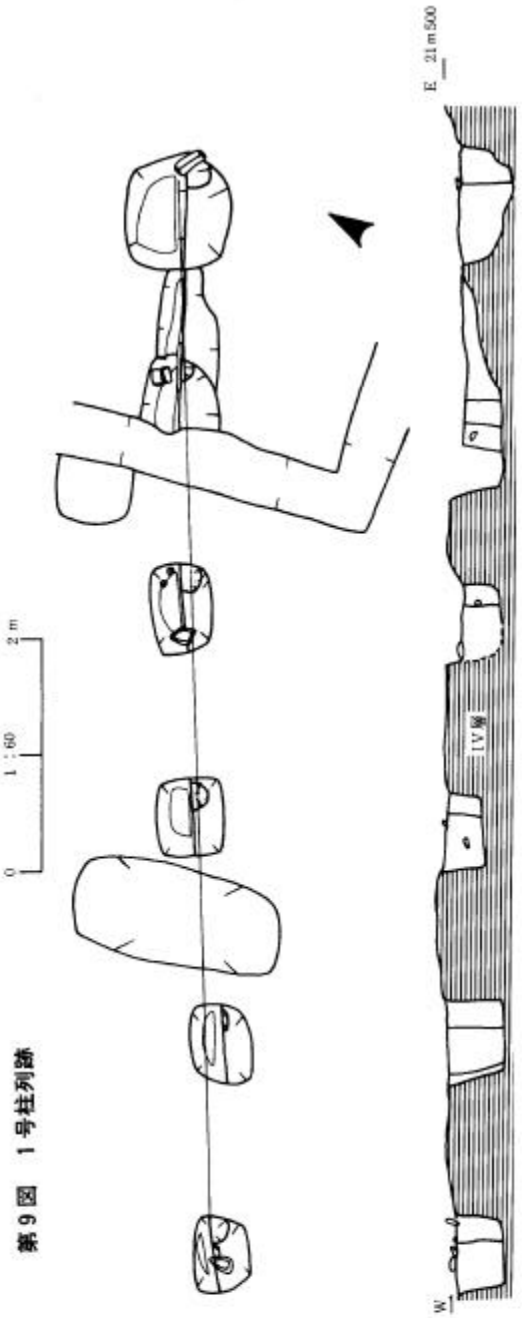
Ⅳ層上面で検出された５間（北より１．６５ｍ＋１．７８ｍ＋１．８８ｍ＋１．９５ｍ＋１．８０ｍ）の柱列である。東で北に３３度振れる。コーナー部が確認されなかったため、規模、性格は不明である。掘り方はおおむね長軸７０cm前後、短軸５０cmの方形であり、掘り方の北側に２５cm前後の柱痕が認められた。確認面からの深さは約５０cmである。３号土壙を切っている。



第8図　遺構配置図及び調査区セクション図

１号柱列跡掘り方埋土出土遺物（第１０図）

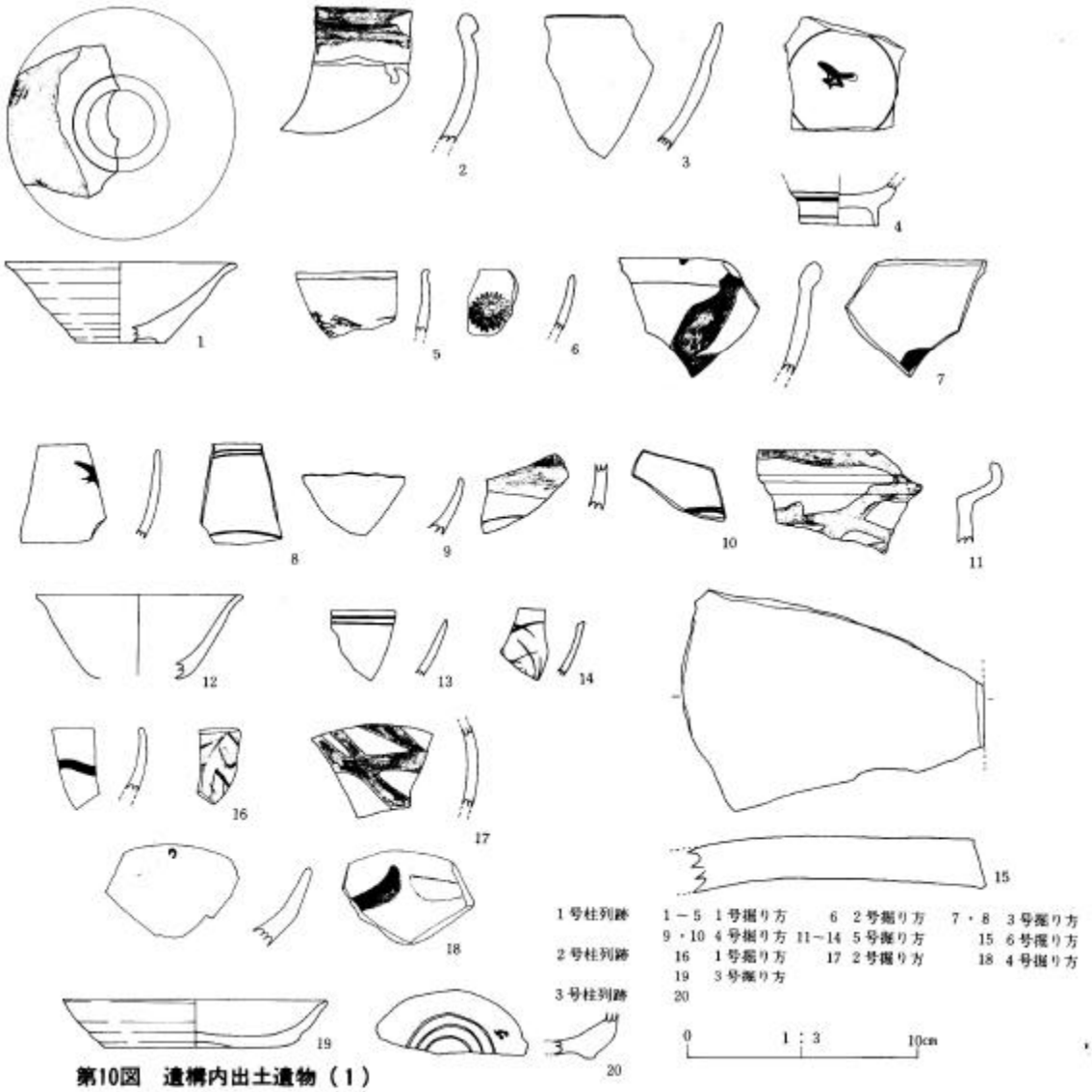
掘り方の番号を便宜上、北から１～６号として出土遺物を分類して図示した。１は肥前産の灰釉陶器皿である（１６００～１６３０年代）。２は片口鉢と考えられる灰釉陶器である。産地は不明であるが、北九州か東北産と考えられる。外面上部及び内面には青灰色のワラ灰釉、外面下部には鉄釉を施している（１７世紀から１８世紀）。３は肥前産の白磁碗である（１６４０～１６６０年代）。４は肥前系の染付碗である。見込部に帆掛船文が施してある（１７８０～１８１０年代）５は染付小杯である。産地は不明であるが関西系と考えられる（１９世紀）。６は肥前産の染付碗である。外面に菊花文をコンニャク印判で施している（１６９０年～１８世紀中頃）。７は関西系か東北産と考えられる陶器片口鉢である。透明釉に緑釉を流している（１８世紀から１９世紀）。８は肥前系染付碗である。外面に飛鳥文を施している（１７８０年～１９世紀）。９は肥前産の染付皿である。型打成形で口縁部に口紅を施している（１６４０～１６５０年代）。１０は染付、１１は鉄釉陶器であり産地、年代は不明である。１２は関西系か瀬戸美濃系と考えられる青磁小碗である（１９世紀）。１３は肥前産の染付碗である（１７世紀後半～１８世紀前半）。１４は肥前系の染付碗である。外面に草文を施こしている。焼成は不良である。１５は塩焼の棟瓦である。



第９図　１号柱列跡

２号柱列跡（第１１図）

Ⅳ層を３０cm程掘り下げた段階で検出された、４間（北より２．４０m＋２．１０m＋１．９０m＋１．９０m）の柱列跡である。東で北に３３度振れ、１号柱列跡とほぼ同じ方向である。掘り方の規模は１号柱列跡より大きくなるが、柱痕の直径はほぼ同じである。



第10図　遺構内出土遺物（1）

２号柱列跡掘り方埋土出土遺物（第１０図）

１号柱列跡同様、掘り方を北から１～５号掘り方として分類して図示した。

１６は肥前系染付皿である（１８世紀）。１７は７と同一個体であると考えられる。１８は肥前産の灰釉陶器皿であり、鉄釉で絵付けしている。１９はかわらけである。ロクロ成形であるが、底部には再調整が施されており、切離しは不明である。底部と体部の間に段を設けている。

３号柱列跡（第８図）

Ⅳ層を３０cm程、掘り下げた段階で検出された、２間（北より２．６ｍ＋１．５ｍ）の柱列であ

る。３号土壙をはさんだ切合い関係から１号柱跡より古い。掘り方は約５０cmの方形である。

３号柱列掘り方埋土出土遺物
（第１０図）

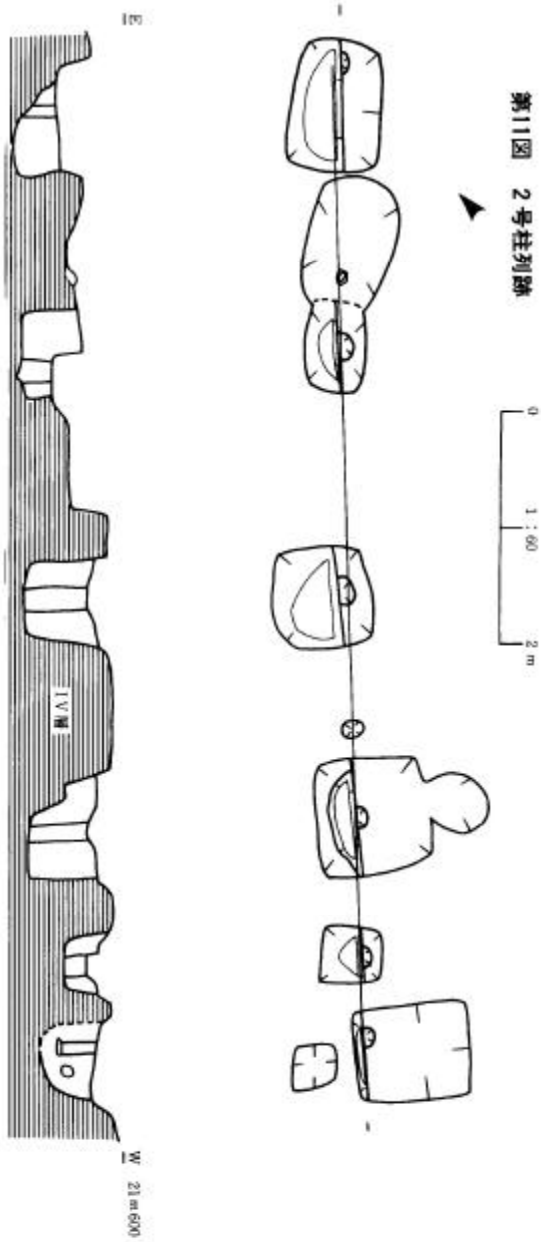
２０は東端の掘り方から出土した灰釉陶器の小杯である。肥前産と考えられる（１５８０～１６１０年代）。

１号土壙（第８図）

調査区東端で検出され、一部調査区外にのびる。５号、６号土壙と重複する。確認面からの深さは約４０cmである。

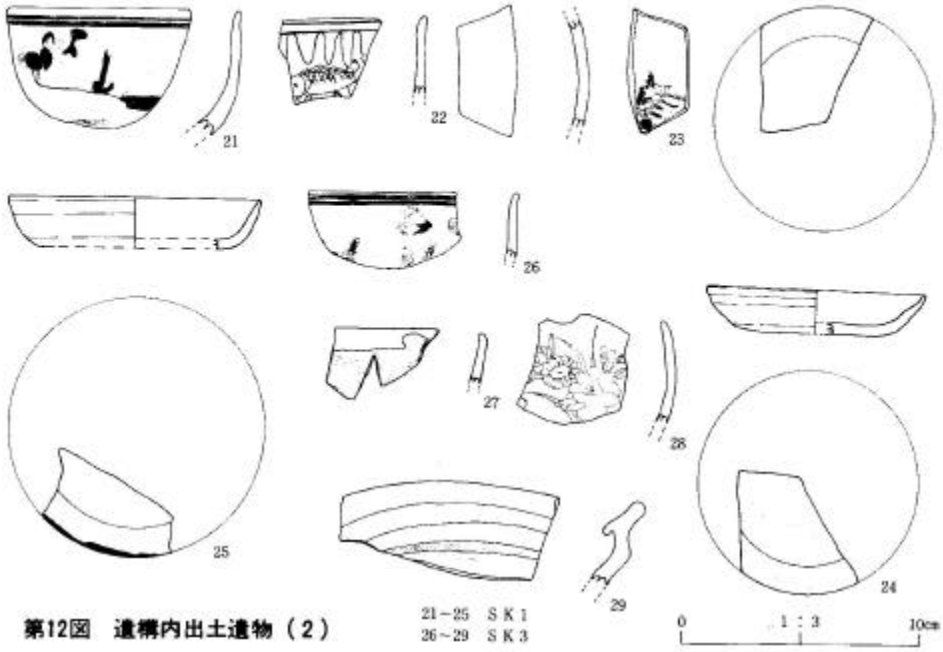
１号土壙埋土出土遺物（第１２図）

２１は肥前産染付碗である。外面に折枝花文を施している。高台部は無釉である（１６３０～１６５０年代）。２２は肥前産染付碗である。外面に網目魚文を施している（１６５０～１６６０年代）。２３は京焼風陶器皿であり、肥前産の可能性が強い。見込部に山水文を施してある（１７世紀後半）。２４、２５はかわらけである。ロクロ成形で底部を中心に再調整を施している。２５には口縁部を中心にススが付着しており、燈明皿と考えられる。

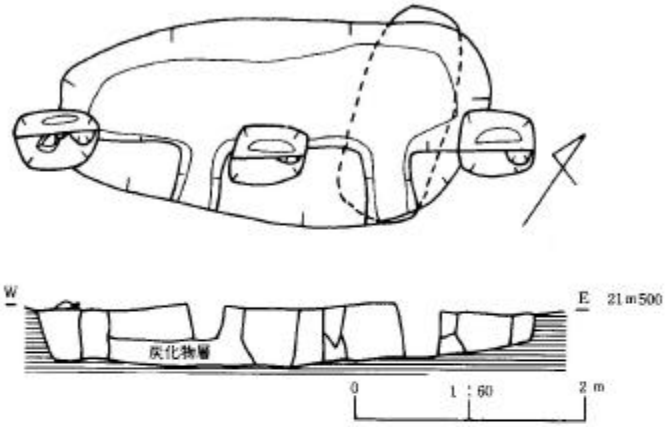


３号土壙（第１３図）

Ⅳ層上面で検出された、長軸約３．８０m、短軸約１．８０mの土壙である。切り合い関係から、３号建物跡より新しく１号建物跡より古いと考えられる。確認面からの深さは５０cmであるが、底部２０cm位の範囲には、びっしりと炭化物が堆積している。



第12図　遺構内出土遺物（２）　21～25　ＳＫ１　26～29　ＳＫ３



３号土壙埋土出土遺物

（第１２、１４図）

３号土壙の埋土上層出土遺物と下層の炭化物層出土遺物に分類して図示した。

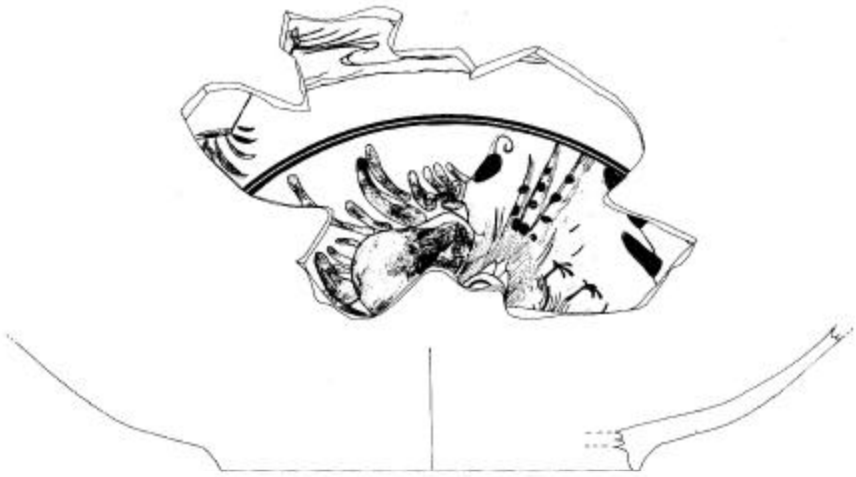
２６は肥前産染付碗である。外面には折枝花文が施してある（１６３０～５０年代）。２７は肥前産の陶器碗で、外面に透明釉を施し、銅緑釉を流し込んでいるが、銅緑釉の大部分は赤く発色している。２８は関西系と考えられる染付小鉢である（１９世紀）。２９は鉄釉陶器である。３０は肥前産の染付大皿である。３１は火鉢と考えられる瓦質陶器である。３２は肥前産と考えられる丸皿である。

４号土壙（第８図）

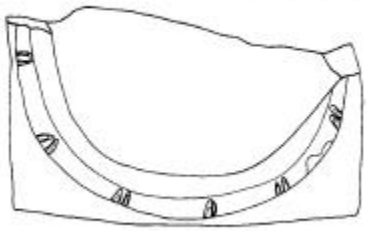
１号及び２号柱列跡の北側に検出された長軸約１．８０ｍ、短軸約１．１０ｍの土壙である。埋土の上部、下部を問わず、完型品を含む多量の陶磁器が出土しており、廃棄穴の可能性が強い。

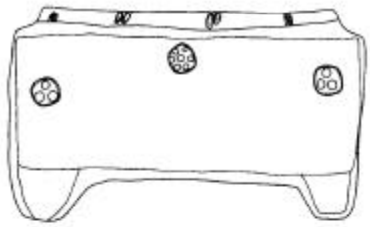
４号土壙埋土出土遺物（第１５図）

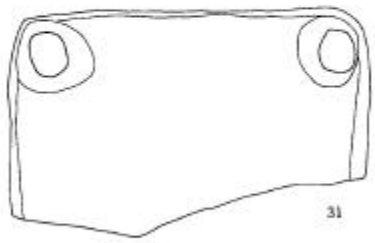
３３は肥前系染付小碗である。外面に唐草文が施してある（１８世紀中頃～末）。３４は肥前産



30







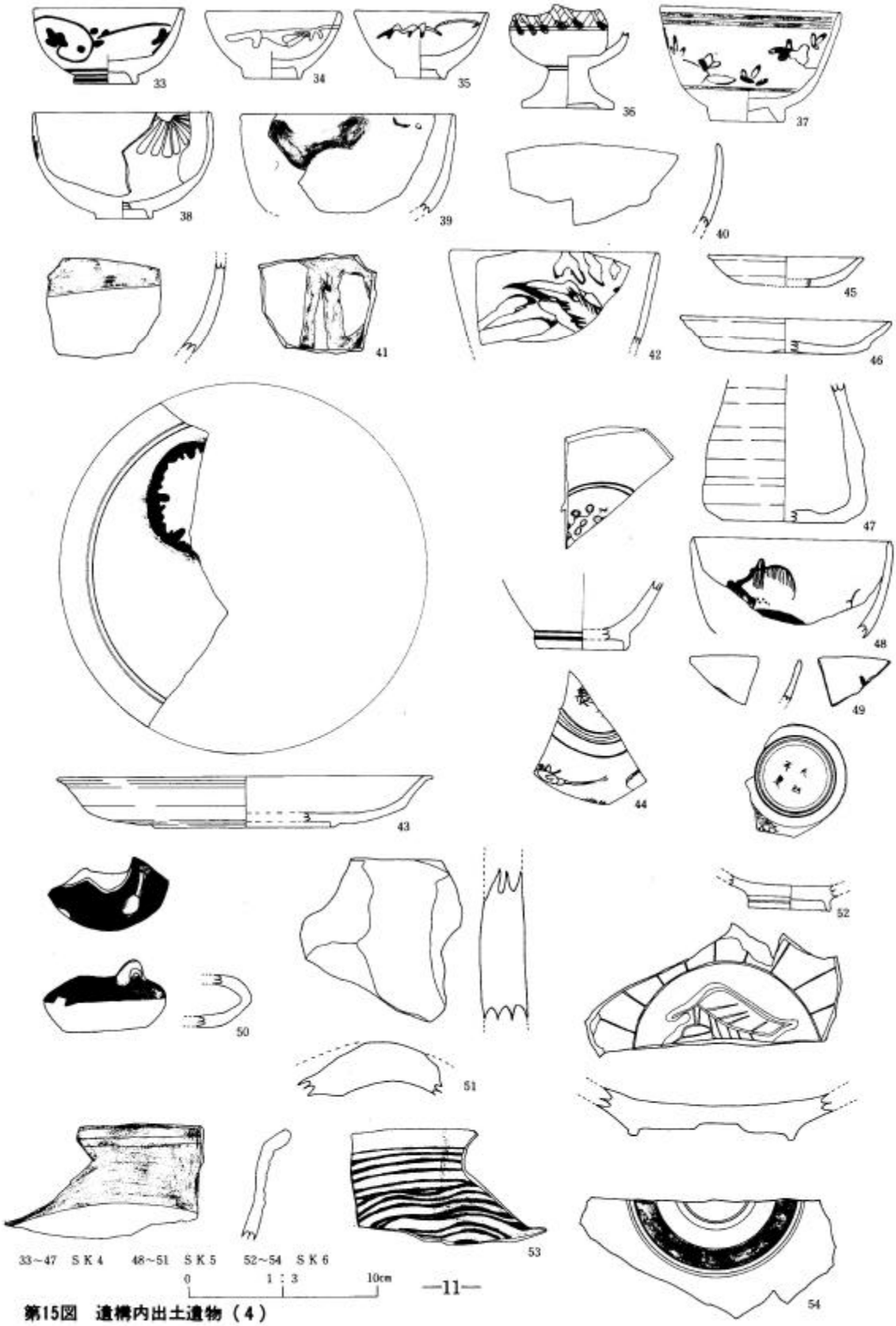
31

32

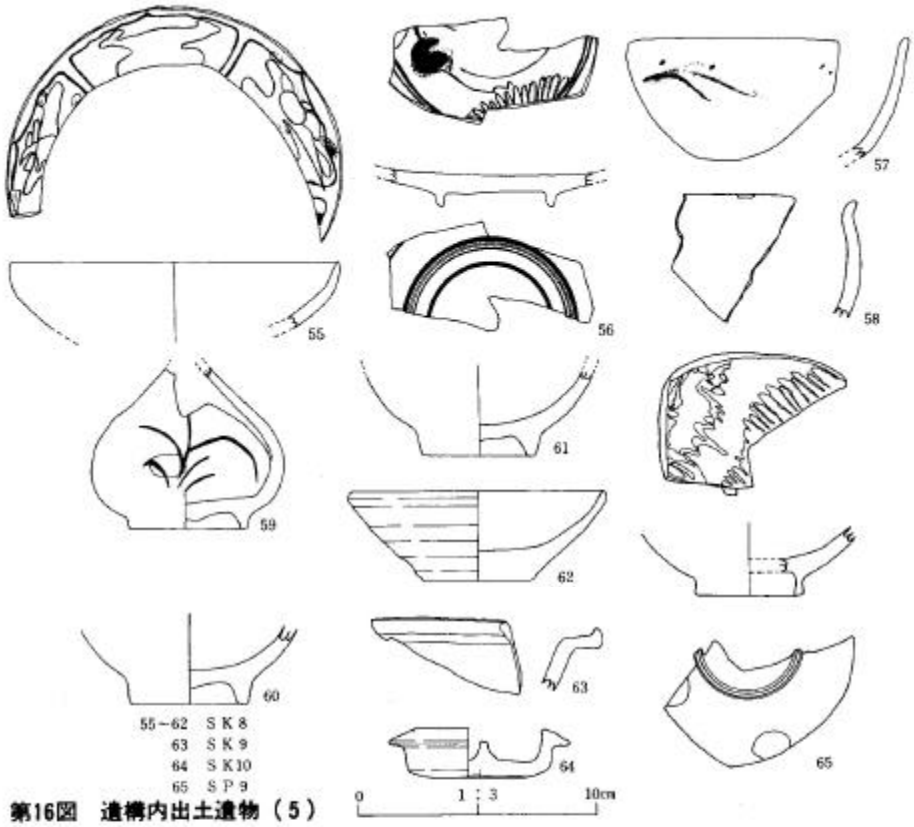
0　1：3　10cm

30・31　ＳＫ３埋土上層
32　ＳＫ３埋土下層炭化物層

第14図　遺構内出土遺物（３）

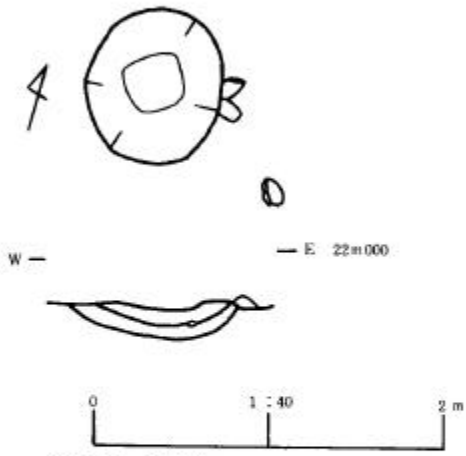


第15図 遺構内出土遺物（4）



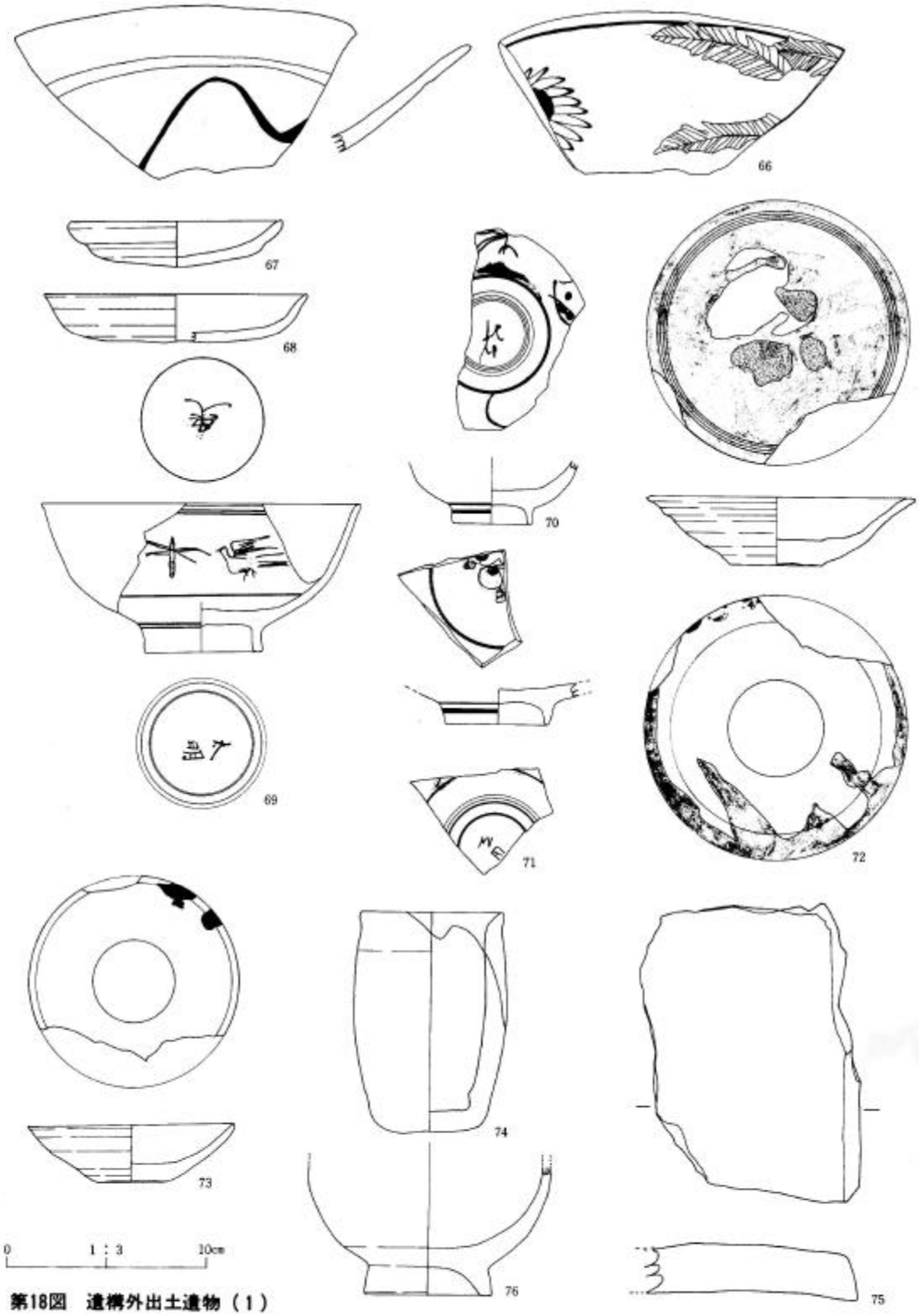
第16図　遺構内出土遺物（５）

の染付小杯であり、外面に笹文が施してある（１８世紀）。３５は肥前産と考えられる染付小杯である（１８世紀）。３６は肥前産と考えられる染付仏花瓶である（１８世紀末）。３７は肥前産の染付碗であり、外面に折枝花文を施してある。高台部は無釉である（１６３０～１６５０年代）。３８は京焼風の碗である。高台部を除いて透明釉を施し、絵付をしているが焼成の不良によりとんでいる（１８世紀）。３９は肥前産陶器碗である。透明釉に銅緑釉を流し込んでいるが大部分が赤く発色している（１７世紀）。４０は肥前産と考えられる京焼風陶器



第17図　ＳＸ１

皿である（１７世紀後半～１８世紀前半）。４１は灰釉陶器である。４２は緑、青、赤を用いた京焼風色絵碗である（１７世紀後半～１８世紀前半）。４３は肥前産と考えられる丸皿である（１７世紀中頃）。４４は染付碗である。底部に「製」の銘がある。４５と４６はかわらけである。ロクロ成形で再調整を施している。４６は底部と体部の間に段を設けている。４７は鉄釉陶器、花瓶と思われる。



第18図　遺構外出土遺物（1）

５号土壙及び６号土壙（第８図）

１号土壙同様調査区東端で検出され、一部調査区外にのびる。ともに１号土壙と重複する。

５号土壙埋土出土遺物（第１５図）

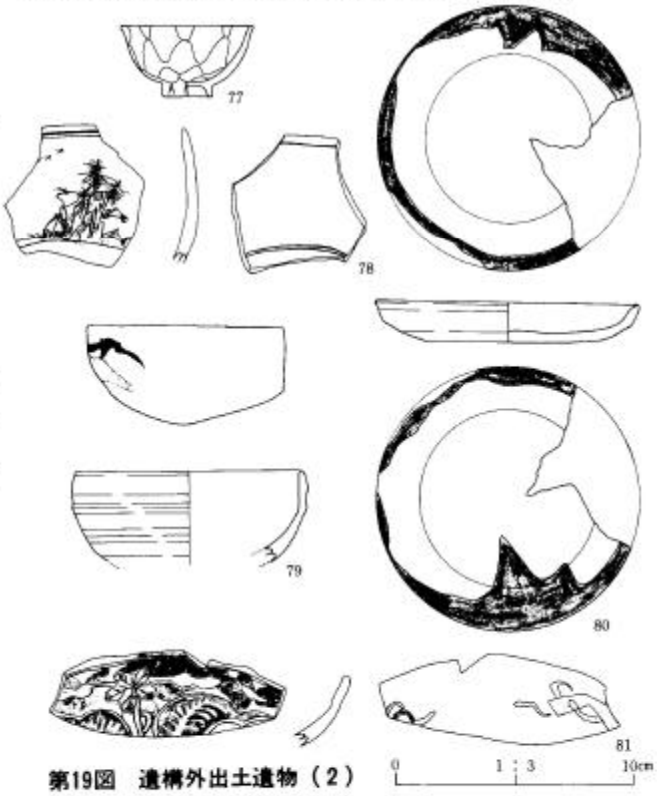
４８は染付鉢である（１７世紀後半）。４９は透明釉が施してある陶器である。５０は瀬戸、美濃系の鉄釉陶器である。５１はいぶし瓦の丸瓦である。

６号土壙埋土出土遺物（第１５図）

５２は肥前産の染付碗であり、底部に「大明年製」の銘がある（１６７０年～１７２０年代）。５３は鉄釉陶器、５４は青磁の皿である。

８号土壙（第８図）

一部、公園の池により壊されている。一辺約６０cmの方形の土壙である。



第19図　遺構外出土遺物（２）

８号土壙埋土出土遺物（第１６図）

５５、５６はともに染付丸皿である。５７は染付碗、５８は陶器碗であり透明釉を施している。５９は肥前産の染付花瓶（１６４０年～１７世紀末）。６０は青磁碗である。６１は肥前産の陶器碗である。内外に透明釉を施しており、外面の焼成は不良である（１７世紀）。６２はかわらけ、ロクロ焼成で回転糸切りである。

９号土壙（第８図）

２号柱列の掘り方を切っている。長軸約１．２０ｍ、短軸約０．７ｍ、深さ約１０cmの浅い土壙である。

９号土壙埋土出土遺物（第１６図）

６３は灰釉陶器である。

１０号土壙（第８図）

２号柱列の掘り方を切っている。長軸約８０cm、短軸約６０cm、深さ約１０cmの浅い土壙である。

１０号土壙埋土出土遺物（第１６図）

６４は関西系の鉄釉の土瓶の蓋である（１８世紀後半～１９世紀）。

９号ピット（第８図）

１号柱列と２号柱列の間で検出された直径約３０cm、深さ約２０cmのピットである。

９号ピット埋土出土遺物（第１６図）

６５は肥前産の刷毛目陶器碗である。内面に刷毛目、外面にほたる手を施している（１６９０～１８世紀前半）。

１号焼土遺構（第１７図）

調査区の北西部で検出された直径約７０cmの円形の焼土遺構である。中心部に固く焼締まった焼土がレンズ状に堆積している。性格等は不明である。

遺構外出土遺物（第１８、１９図）

第１８図はⅣ層出土遺物。第１９図はⅠ層からⅢ層までの出土である。

６６は肥前産、染付の大皿である（１７世紀中頃）。６７、６８はかわらけである。ロクロ調整であるが、底部に再調整を施しており切離しは不明である。６９は肥前産、染付の碗である。底部に太明の銘がある。７０、７１は染付碗である。ともに底部に銘がある。７２は鉄釉の溝縁皿である。砂目積。（１６００年～１６３０年代）。７３は鉄釉陶器で口縁部にススが付着していることから燈明皿として用いられたと考えられる。７４は焼塩壷である。７５はいぶし瓦（棟瓦）である。７６は透明釉を施した陶器碗である。高台部は無釉である。７７は盃、７８は山水文が施された染付碗である。７９は透明釉を施した京焼風の陶器である。８０は手づくね成形のかわらけであり、ススの付着から燈明皿としての使用が考えられる。８１は肥前産の色絵皿である。なお、７７、８１は明治時代以降の遺物と考えられる。

〔５〕考察

（１）遺構について

①１号、２号柱列跡について

１号及び２号柱列跡は、ほぼ同規模、同方向であること、両柱列跡の確認レベルの高低差から２号柱列跡が古いと考えられること、両柱列跡の掘り方断面観察から同位置での建替えは認められないことから１号柱列跡は２号柱列跡の直後の建替えであると考えられる。

最初に掘り方埋土出土遺物からの両柱列の年代を考えてみたい（第２０図）。１号柱列跡掘り方埋土出土で最も新しい遺物は１７８０～１８１０年代の４の肥前系染付碗と１９世紀の５の染付小杯である。この２点の遺物から１号柱列跡の年代は１９世紀以降と考えられる。２号柱列跡は掘り方埋土出土遺物のなかで年代が特定できたものは少なく、遺物からは１８世紀から１９世紀までの幅広い年代しか与えられない。しかし直径２５cm程度の柱規模の掘立柱の耐久年数から考えれば直後の建替えである１号柱列跡よりそれほど古いとは考えられず、１８世紀末から１９世紀と考えられる。

第20図　出土遺物年代一覧表　点数は特定された年代の幅が広い遺物

次に文献資料からこの柱列跡の性格を検討してみたい。二の丸東南部は築城以来、安楽院、鐘楼、勘定所、境目方役所等が順次設置されていき、１８５４年の火災で勘定所、境目方役所、安楽院が炎上した後、勘定所、境目方役所は再建されたが安楽院は再建されなかった。したがってこの地区における建物配置は１８５４年の火災の前後で大きく異なることになる。そして１８５４年以前の建物配置は第２、３図のようにおおまかにしか把握できないが、１８５４年以降の建物配置は第５図の１８８４年の測量図によりかなりの精度で把握できる。もちろん作成年代の古さのせいか現在の地形測量図に記されている石段、土塁等の位置関係は若干ずれるが、参考になると考えられる。両図を一部修正して重ね、調査区をおとすと第２１図のようになる。この図面から考えると１号、２号柱列はその位置、方向から１８５４年以降の段階の勘定所、境目方役所周囲を囲む板塀のよう

な区画施設であると考えられる。そうなれば建物配置が大きく異なる１８５４年の火災をはさんで同位置、同方向の板塀の建替えが行われたとは考えにくい。したがって２号柱列は１８５４年の火災後数年のうちに建てられた板塀、１号柱列はその後、明治維新までの十数年の間に建替えられた板塀であると考えられる。掘り方埋土出土遺物の年代とも矛盾しない。

第21図　調査区位置図、秋田旧城之図合成図

②３号柱列及び土壙について

今回の発掘調査では１２基の土壙、９基のピットが検出された。その埋土出土遺物のなかで年代が特定された遺物は第２０図のとおりである。

これ等の土壙、ピットのなかで興味深い特徴があるのが、３号及び４号土壙である。３号土壙は長軸約３．８ｍ、短軸約１．８ｍの土壙である。埋土の下層は厚さ２０cmにわたり炭化物が堆積している。その量が非常に多量であること、堆積状態が土の混じらない炭化物のみであることからまとまった量の炭化物を廃棄した土壙であると考えられる。１号柱列跡に切られていることもあり、１８５４年の火災の後始末に関連する可能性もある。そのように仮定すれば、３号土壙に切られている３号柱列跡は火災以前の遺構になる。しかし年代が判明した遺物が少なく、遺物による年代の特定が困難であること、二次的に火を受けた出土遺物が認められないことから断定はできない。４号土壙は長軸約１．８ｍ、短軸約１．１ｍの土壙である。ほぼ完形の陶磁器が多量に出土しており、廃棄穴の可能性が強い。

（２）遺物について

①陶磁器について

今回の発掘調査で出土した陶磁器には次のような特徴、傾向が認められる。

・産地の特定された陶磁器の半数以上は肥前産、肥前系が占める。

・肥前産陶磁器の年代は１７世紀に比較的集中している。
・確実に東北地方産と特定された陶磁器は認められなかった。しかし産地不明陶磁器、小破片のなかに含まれている可能性は強い。
・関西、瀬戸美濃系は数点しか認められなかった。産地不明陶磁器、小破片のなかにも多量に含まれている可能性は少ない。
・器種的に特にめだった偏り、産地、年代等に伴う相関関係は認められない。しかし染付の大皿等の出土は藩主の居城という遺跡の性格を反映したものと思われる。
・焼成不良などの不良品も若干含まれており、多少の不良品も用いたと考えられる。

１７～１９世紀における東北地方の陶磁器の消費状況はおおまかにみれば、１７世紀から１８世紀中頃までは瀬戸美濃、肥前産が主体を占め、１８世紀中頃から東北地方産が増加しはじめ、１９世紀後半になると東北地方産が主体となると考えられる（注１）。この傾向は東北地方における陶磁器生産状況、その開窯時期、成長時期とも合致する。しかし東北地方内各地域単位、藩単位での陶磁器の流通、消費状況とその変遷についてはあきらかではない。したがって今回の調査で認められた傾向、特に１７世紀においては肥前が主体で関西、瀬戸美濃が少ないという傾向は当時の秋田藩における特徴なのか、藩主の居城という遺跡の性格の特徴なのかははっきりしない（注２）。今後の秋田市周辺地域における近世の都市、集落遺跡及び久保田城跡の調査資料の増加を待って検討したい。（注３）

②その他の遺物について

今回の発掘調査では、陶磁器の他にかわらけ、焼塩壷、瓦等が出土している。

かわらけは、ロクロ成形で底部を再調整しているタイプとロクロ成形で底部を再調整しないタイプと手づくね成形のタイプが認められた。

焼塩壷は１点のみの出土である。純度の高い高級食塩の流通に伴うものであり、他の出土例からも城跡、武家屋敷、有力社寺等に限定される遺物である。

瓦はいぶし瓦と塩焼瓦の両者が出土している。久保田城の屋根の構造については、築城当初から１９世紀初頭までは寺院、土蔵等の一部の建物を除いて瓦は用いられていなかったと考えられる。そして１９世紀以降に用いられた瓦は１９８８年に実施された本丸御隅櫓の発掘調査により出土した瓦から桟瓦葺が中心であったと考えられる。しかし今回の調査では１点だけであるが、初めて丸瓦が出土し久保田城における本瓦葺の建物の存在を裏付けている。出土丸瓦（５１）はいぶし瓦であるが破片であり年代等は不明である。この瓦は久保田城で本格的に瓦が使用されはじめた１９世紀以降のものか、１９世紀以前に安楽院、善性院等の寺院、役所に付随した土蔵等に用いられたものかは不明であるが、久保田城の建物の構造を研究するうえで重要な資料であると考えられる。

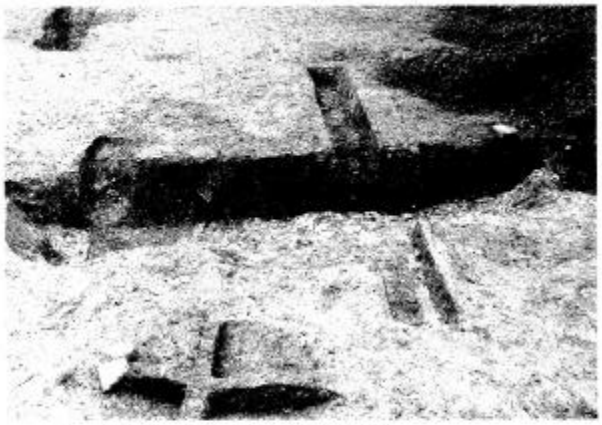
（注１）参考文献１４、１５、１８、２４、２５、２６による。

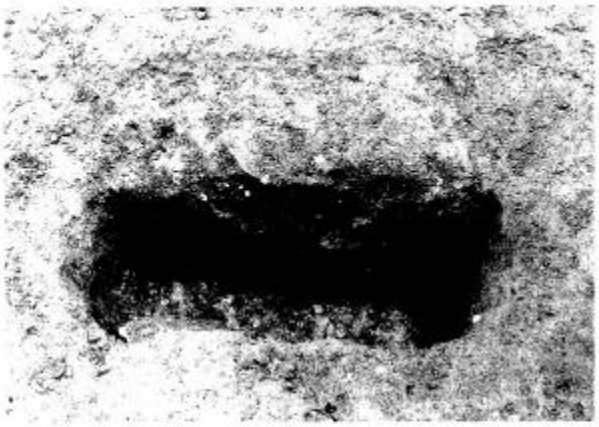
（注２）参考文献１１（弘前城）１４、１５、２４（仙台城）２１（久保田城御隅櫓跡）２５（盛岡城）において出土陶磁器の産地に今回の調査のような偏りは認められなかった。

（注３）秋田市における近世集落遺跡の発掘調査資料として参考文献８（後城遺跡）があるが出土遺物は１６世紀末までが中心であり比較検討はできない。

（参考文献）

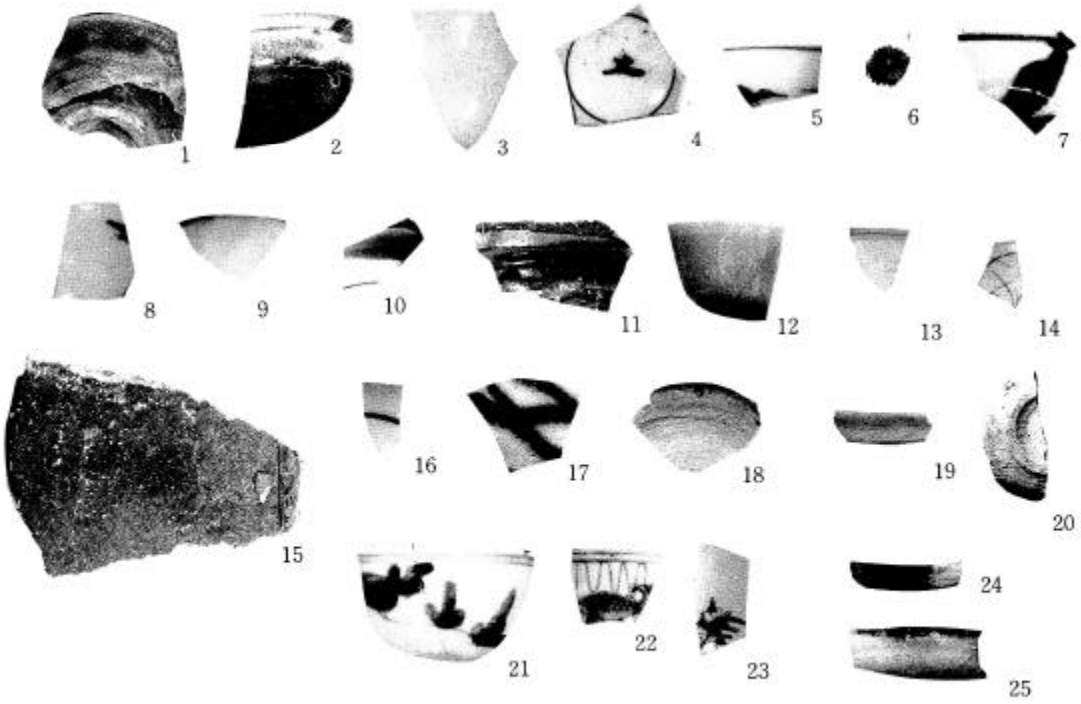
1	１８９６、１８９８	橋本宗彦	秋田沿革史大成（上、下）
2	１９０６	安藤和風　木村圭一郎	秋田縣案内
3	１９７１	東京大学史料編纂室	大日本古記録　梅津政景日記
4	１９７１	今村義孝	新秋田叢書（一）（二）羽陰史略
5	１９７１	井上隆明他	新秋田叢書（七）～（九）伊頭園茶話
6	１９７３	相沢清治　井上隆明	新秋田叢書（一）（二）八丁夜話
7	１９７６	井上隆明他	新秋田叢書（一）～（八）羽陰温故誌
8	１９７８	秋田市教育委員会	後城遺跡発掘調査報告書
9	１９８０	秋田県立図書館	国典類抄第十巻　軍部（全）
１０	１９８１	駒井鋼之助	かわら日本史
１１	１９８１	弘前市教育委員会	史跡弘前城跡
１２	１９８４	渡部景一	秋田市歴史地図
１３	１９８４	平凡社編集部編	やきもの辞典
１４	１９８５	東北大学埋蔵文化財調査委員会	東北大学埋蔵文化財調査年報
１５	１９８５	仙台市教育委員会	仙台城三の丸
１６	１９８５	渡辺誠	江戸の焼塩壺　季刊考古学１３所収
１７	１９８５	大橋康二	肥前磁器の流れ　季刊考古学１３所収
１８	１９８６	仙台市教育委員会	柳生
１９	１９８８	文化財建造物保存技術協会	久保田城御物頭御番所保存整備工事報告書
２０	１９８９	大橋康二	肥前陶磁　考古学ライブラリー５５
２１	１９８９	秋田市教育委員会	久保田城跡－本丸御隅櫓跡発掘調査報告書－
２２	１９８９	渡部景一	久保田城ものがたり
２３	１９８９	原武男	佐竹家譜（前　中　後）
２４	１９９０	東北大学埋蔵文化財調査委員会	東北大学埋蔵文化財調査年報３
２５	１９９１	盛岡市教育委員会	盛岡城Ⅰ
２６	１９９１	秋田市教育委員会	寺内焼窯跡





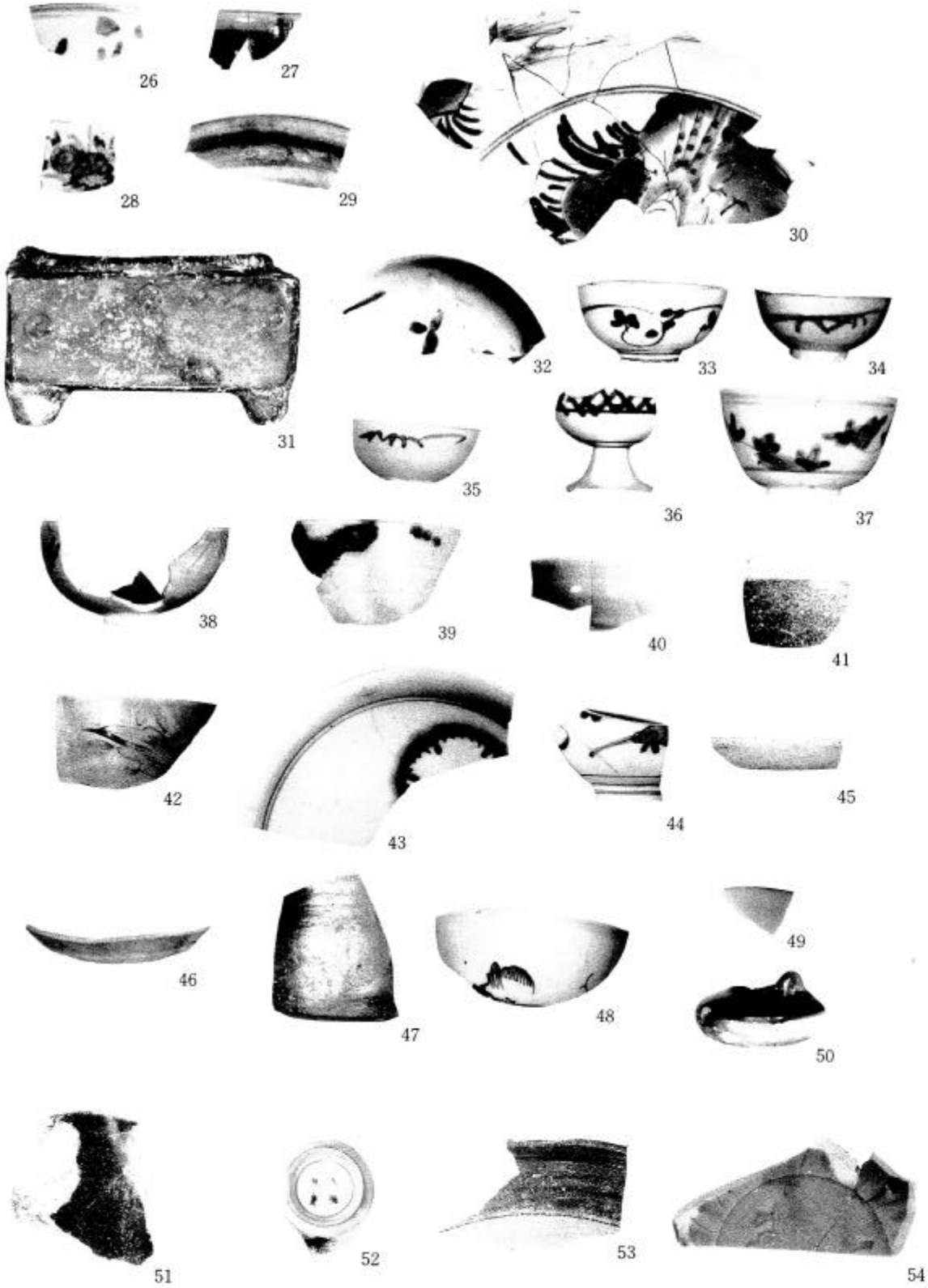
上　全景東→（ＳＡ１断割り段階）
下　ＳＫ３埋土断面北→

上　全景東→（ＳＡ２検出段階）
下　ＳＡ１掘方埋土断面南→



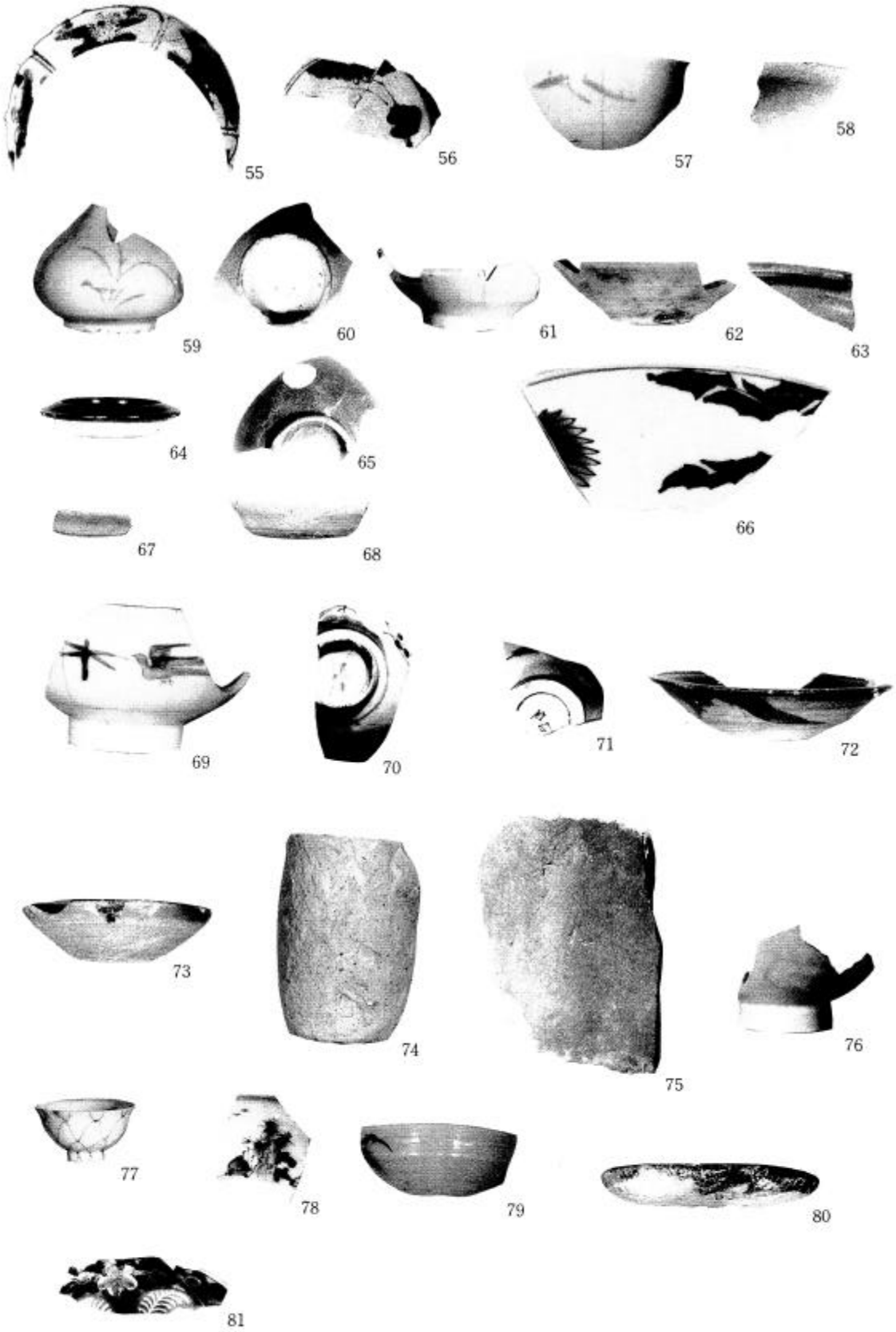
図版１

Ｓ　１：３


26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54

図版 2

S　1：3


55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81

図版 3

S 1：3

久　保　田　城　跡

— 佐竹史料館増築に伴う二の丸発掘調査報告書 —

平成4年3月

発行　秋田市教育委員会

印刷　秋田マイクロ写真印刷㈱